



コラボ

著・藍澤たすく
イラスト・(ごめ改め)かもめ遊羽



「浩二先輩、好きです！」

夕陽をバックに立つ美少女。

そのうるうるとした瞳が俺をしつかりと捉えている。さらりと艶やかな黒髪のロング、造作の整った目鼻立ち。ほんのり桜色に染まつた、まるでアクセサリーのような唇。

美少女だ。まさしくとなき美少女だ。

正直「放課後、体育館の裏で待つてます★」という手紙が下駄箱に入っていたときは、絶対嘘だと思った。手の込んだドッキリだと思った。

だが信じて来て良かった。こんな可愛い子が俺にコクつてくれるなんて……。待つてくれたなんて……！

小金沢浩二。彼女いない歴15年＝実年齢。中肉中背。ベン字3級。それ以外特技なし。

そんな俺にも、ついにモテ期が、モテ期がやつてきたのだあー！

「先輩、好きです！ 本当に好きなんです！」

「お、おう。俺で良ければまあ、つ、つきあ」

「だから死んでください！」

「つても良いんだぜって、はああ？！」

精一杯かつこつけて返事をしようとした俺に意外な言葉が返ってきた。

なんだ？ 「死んでください」 って？ コクる台詞としてはおかしくね？

あ、そうか、もしかしてあれか、「俺が死ぬほど好き」 ってことか？

「えい！」

「わあ！」

いつの間にか少女の手に握られていたサバイバルナイフが最短距離で俺の心臓目がけて突っ込んできた。

間違いなく今までの人生で最大限に反射神経を使つた瞬間だつた。

すんでのところでそれを避ける。

つていうかあんな不意打ちよく避けたな！ 自分を褒めてあげたい！

「どうして避けるんです？！」

「なんで刺すんだよ！」

「だってルシ子は悪魔ですから、浩二先輩と添い遂げるためには浩二先輩に死んで冥界に来

でももうしかないんですううーー！」

電波だ。

この女、電波だ。

なまじ外見が良いだけに、電波具合が際立つてゐる。

正直、今の俺はこれまでの人生で最大級に失禁しそうだ。

いや実は、さつきの攻撃で数滴滲み出てる。

「大丈夫。おとなしくしてくれていれば痛みは一瞬ですから！」

「くあ、わせdiffgyふじこわーーー！」

自分で名状しがたい悲鳴をあげながら俺は脱兎のごとく駆け出した。

逃げろ！ とにかく逃げるんだ！ 命あつてのモノダネだ！

「無駄ですよ。ルシ子からは逃げられない……そう教わりませんでしたか、浩二先輩？」

誰にだよ!? 背後から聞こえる声に心中でツッコミつつも俺は校庭を全速力で駆け抜ける。足は速い方ではないが、少なくとも一般中学生女子よりは速いはずだ。大丈夫、逃げ切れる！

……何かおかしい。

放課後、グラウンドで練習をしているはずの野球部やサッカー部の連中が見当たらない。

いや、それどころか下校している生徒が誰一人いない。

「ふふふ。浩二先輩とルシ子だけの世界を作るために結界を張らせていただきました♥」

不意に耳許で囁かれた。

横を見ると漆黒の翼を広げ、俺の横にびたりとくつつくように飛んでいる少女の姿があった。

え？ なに？ ホンモノ？

この娘、本当に悪魔なの？！

「お待ちなさい！」

刹那、凛とした声が響いた。

目をあげて見ると生徒会長の高円寺美可子先輩が校門に立つてゐる。

「ダメです！ 逃げてください、美可子先輩！ この子、いやこの女、ほんとうに悪魔なんですか！」

「あたしの浩二くんに何をしているの！」

え？ 美可子先輩、今、「あたしの」って言つた……？

「なぜ!? ルシ子の張つた結界は完璧のはず……!? いいもん！ 邪魔するやつはぜーんぶ皆殺しだから！」

一瞬だけ驚愕の色を浮かべた少女は一転、睨みつけるような視線を美可子に叩きつける。

「悠久の闇よ、汝が血の契約により怨敵撃ち碎くべし！」

「清冽なる光条よ、三位一体の真理によりて穢れし魂を殲滅せん！」

二人の声が重なつて響いた瞬間、溢れ出る漆黒の闇と煌く光が正面から激突し、地鳴りの

ような爆発音が衝撃波を伴つて世界を圧倒した。

何、これ？ いつたい何が起こつてんの……？

「く……覚えてなさいよ！」

薄れゆく意識の最後に、悪魔少女の悔しげな呟きが聞こえたような……気がした……。

「大丈夫？ 浩二君？」

目を開けると、美可子先輩が心配そうに俺を覗き込んでいるのが判つた。

「あれ？ 俺……」

「良かつた、浩二君に何かあつたらあたし生きていけないもの」

安堵した表情で語りかける先輩の背中には……純白の羽根が広がつていた！？

「あの、先輩、ミカ子つて……まさか……ミカエル、ですか……？」

「あら？ 知らなかつたの？」

楽しそうにころころと笑う先輩の手には、なぜかどこかで見たことがあるようなサバイバル

ナイフが握られていた。

「さあ、浩二君。あたしと天界で、永遠に、幸せに、暮らしましょう。大丈夫、痛いのは一瞬だけだから」

おしまい